

## 発刊にあたって

南信州高森町は、中央アルプスと南アルプスに囲まれ、天竜川がその間を流れる伊那谷の南部、天竜川の西岸に広がる段丘の小さな町です。西に中央アルプスに続く本高森山 1,890.1m がそびえ、高森町はこの最高地点から東に向かって、ゆるやかに扇状地をつくり広がっています。東には仙丈ヶ岳、塩見岳、赤石岳など、南アルプスの 3 千メートル峰を望むことができ、この山並みは四季折々に色を変え、多くの人々の目を楽しませてくれます。



このような多様な地形、環境がみられる私たちの町には、どのような動物や植物が生息、生育しているのでしょうか。高森町では平成 28 年より 3 年間をかけて、地域の有識者の皆さまに調査を依頼し、今回、『高森町の動植物』としてとりまとめ、発刊することとなりました。

近年は、温暖化など地球規模の環境問題が取り上げられ、地域ごとに異なる生物の多様性が保全され、長年かけて形成されてきた地域の自然を守り伝えていくことの重要性が高まっています。

高森町においても、かつて数多く見られた里山の植物は減少し、特産市田柿が早く熟してしまうなど、少なからず温暖化の影響を受けており、さらに、こうした植生の変化は、鳥獣の生息や分布にも影響を与え、近年の農業被害の拡大につながっていると推測されています。

今回の調査にて明らかとなった高森町の動植物に関する情報を踏まえ、今後、希少生物が保全され、そもそもこの地域にいなかった外来生物を駆除するなど、町全体で身近な生物と親しみ、触れ合いながらも、この地域固有の自然環境が守り伝えられる取り組みが、今以上に広がっていくことを期待しています。

末筆ではありますが、今回の『高森町の動植物』発刊にあたり、町内の動植物について詳しく調査いただき、執筆いただいた関係の皆さま、本書の発刊にご協力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます、一言ごあいさつとさせていただきます。

2020（令和 2）年 3 月  
高森町長 壬生 照玄

## はじめに

高森町は、西側に本高森山を主峰として前高森山、吉田山が<sup>そび</sup>聳え、そこから流下するいくつもの河川は扇状地を縫って東側の天竜川に注ぐこむ、山あり、川あり、段丘ありの変化に富んだ町です。このような地形の町では、動植物も豊かで多く存在していることが知られています。

この町の植物相や動物相についての調査資料は、「高森町高等植物目録」未完（1992年ごろ）浅野一男、「高森名木ガイドマップ」（2011年）高森町自然愛護会、『わたしたちの高森』（2012年改訂）高森町教育委員会、があります。いずれも正確に調査し記録された貴重な資料ですが、未完であったり、特別な樹木を記録したものであったり、小学生向けの平易なものであったり、それぞれ目的にあった価値が高いものの、総合的な動植物相の全体の資料がないのが現状です。

近年、温暖化が進んだり、マツノザイセンチュウによる松枯れが起こったり、田畑、果樹園が居住地、商業地となったり、交通の発達で帰化植物の侵入が激しくなったり、リニア新幹線の工事が始まったり、…などで、自然の改変が著しくなってきました。それに伴って動植物相も変容しつつあります。

この機に、町や町住民は変わりいく自然にどのように対応していくのか望ましいのか問われてきます。そのためには現時点での動植物相を正確に把握することが必要になります。

この度、町の依頼を受けて、それぞれを専門に研究する者たち11人が調査員として、調査・執筆に当たることになりました。いずれもこの飯田・下伊那に居住する還暦を過ぎた、今までそれぞれが研究調査を行ってきた者たちです。

調査期間は2016～2018（平成28～平成30）年の3年間、まとめ執筆は2019年です。

調査員たちが終始、気を配ってきたことは、以下の硬軟相反するような二つの内容です。

- (1) 今の現時点に生息する動物相の戸籍簿、すなわち正確な植物誌、動物誌を作成すること
- (2) 住民の方々が動植物を理解し親しんでいけるような、それぞれの種の形態、生態、分布などを文や写真、図で分かりやすく表すこと

調査員たちは天竜川から本高森山山頂まで、クマやマムシの影に用心しながら、歩ける道は歩いて草木を記録し、谷川には網を入れ魚や水生昆虫を捕らえ、湿地ではカエルやヘビ、カタツムリを探し、樹林や野原では鳥やセミの鳴き声に耳を澄ませ、トンボやチョウを追い、バッタやクモを捕らえました。夜間には自動カメラでタヌキやイノシシを撮影し、夜鳴く鳥の声を聴きました。

手足、体、頭をフル動員して調査し、それを調査員一人ずつ原稿にとりまとめました。多くの方々が楽しんでご覧いただけるような本になっていれば幸いです。

令和2年3月  
動植物調査員長 堤 久